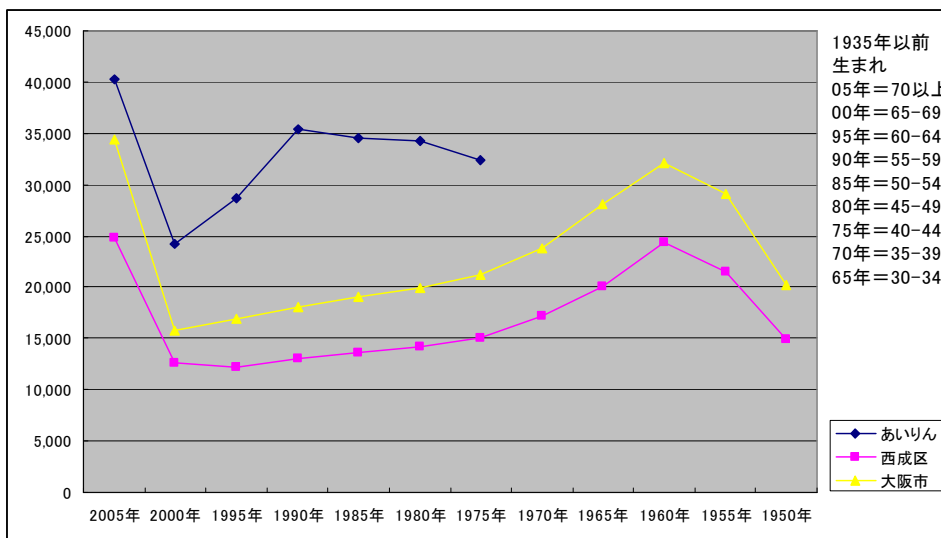
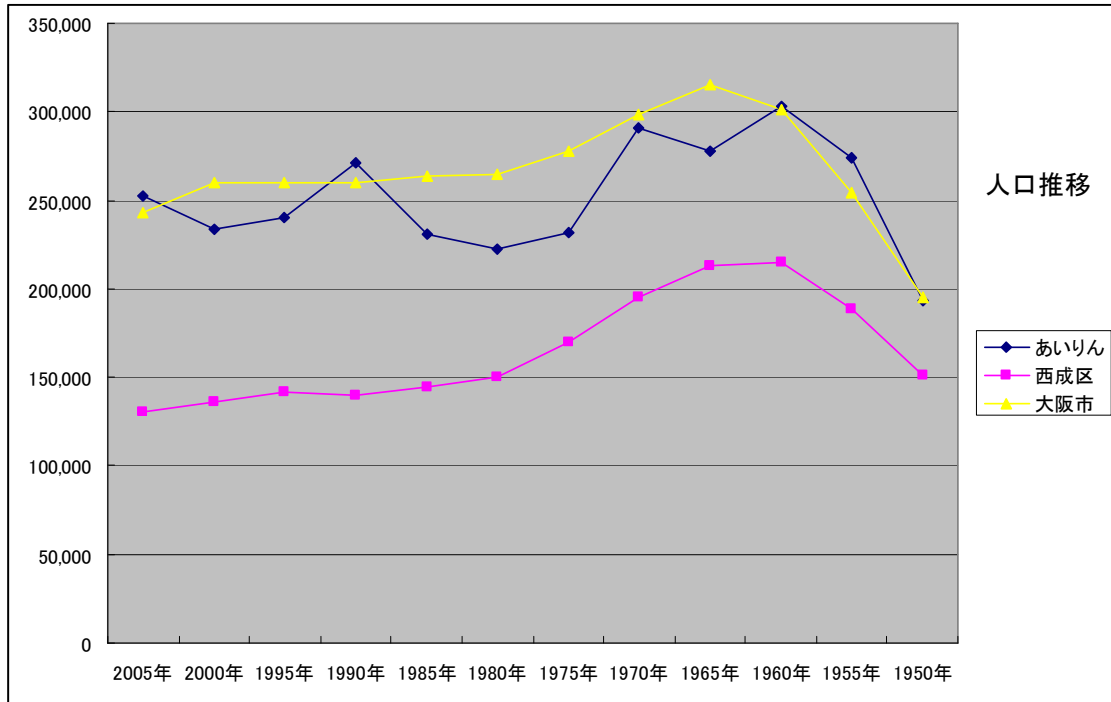


人口推移と世代別推移＝「よそ者」の検討

国勢調査による人口の戦後最大時期は、大阪市が1965年で、西成区1960年です。あいりん地区も西成区と同じ、1960年です（グラフはあいりんの数字を10倍、大阪市を十分

	2005年	2000年	1995年	1990年	1985年	1980年	1975年	1970年	1965年	1960年	1955年	1950年
あいりん	25,241	23,401	23,978	27,080	23,083	22,233	23,217	29,124	27,818	30,306	27,429	19,296
西成区	130,308	136,388	141,768	140,257	144,256	149,716	169,751	194,800	212,819	214,652	188,642	151,487
大阪市	2,426,998	2,595,394	2,603,785	2,603,419	2,633,687	2,645,419	2,777,618	2,980,487	3,156,222	3,011,563	2,547,281	1,955,992



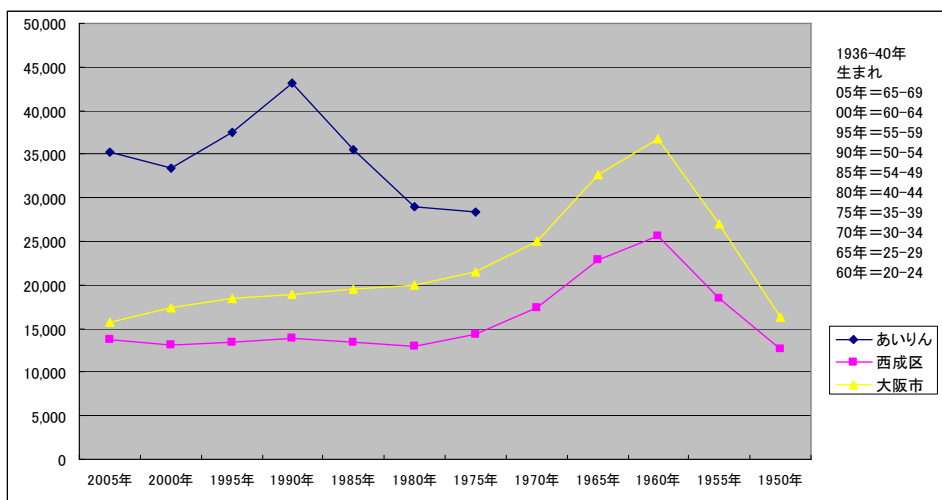
の一にして比較しやすくしています)。あいりん地区を除き、その後は一貫して人口は減少を続けていることとなります。住みにくい大阪市を現すものと考えられます。仕事不足も。

「1935年以前生まれ」のグラフは、2005年国勢調査で70歳以上に該当する人々を示しますが、正確には「1930-35生まれ」の人が、各年国勢調査の時にどれくらい含まれてい

たかを示すものです。2005年の数字だけが5歳刻みではないので、1930年生まれ以前の人すべてを含み、結果として、グラフの線が跳ね上がっています。

5歳刻みで表示すれば、なだらかに左下さがりになります。

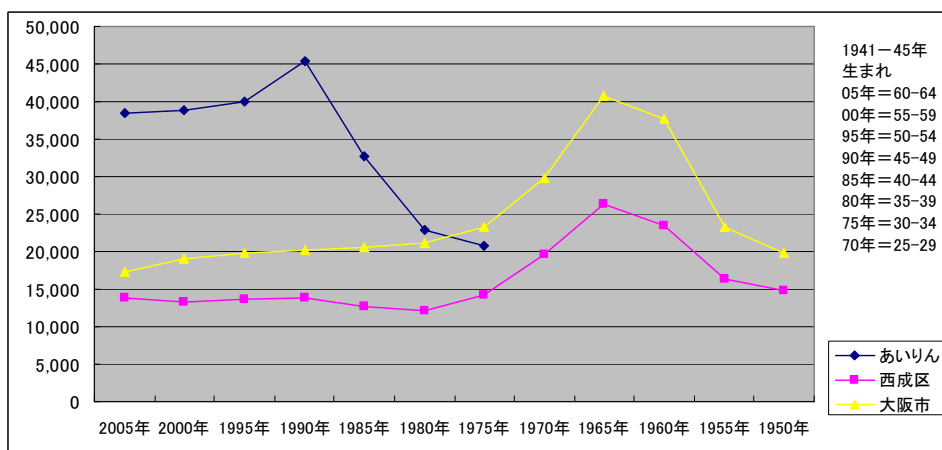
「1930-35生まれ」の人は、大阪市、西成区共に1960年25-29歳で最大となり（ようするに大阪市や西成区にやってきて）、その後減少を続けます。仕事上の移動や大阪近郊の住宅への移動が考えられます。「あいりん」へは、20代後半から登場し、90年（50-59歳）を最大としてその後減少し続けています。2005年の跳ね上がりは、先にも述べたとおり、70歳以上と他の5歳刻みとは年齢区分が異なるためです。



「1936-40年生まれ」の人は、中学や高校を卒業した頃の年齢から、大阪や西成区に登場します。

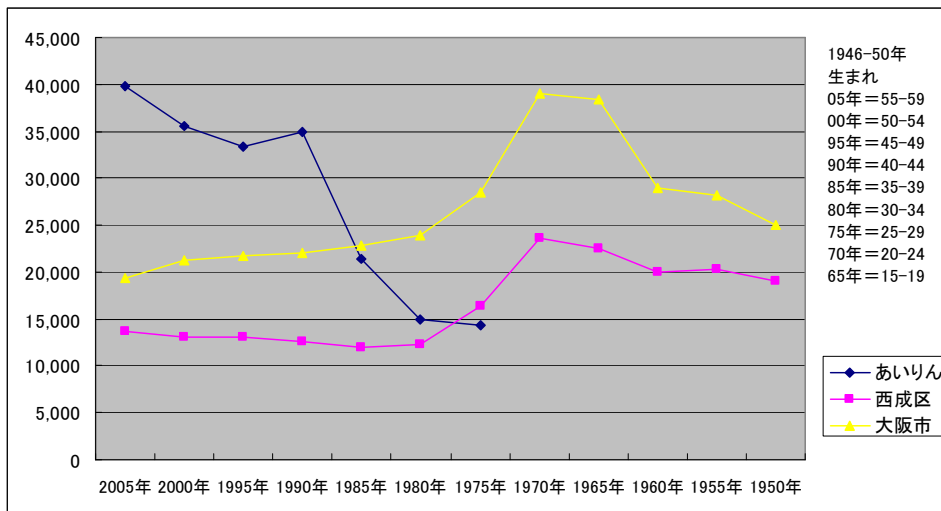
そして、結婚・子育て期を迎えて

（25歳以降）、減少します。あいりん地区では1980年（40-45歳）以降90年にかけて急増します。90年以降減少し、2005年（65-69歳）で回復します。あいりん地区の高齢化の端的に現す人々です。



「1941-45年」生まれは、戦前生まれ最後の世代で、19歳までに親と共に、あるいは単独で大阪に

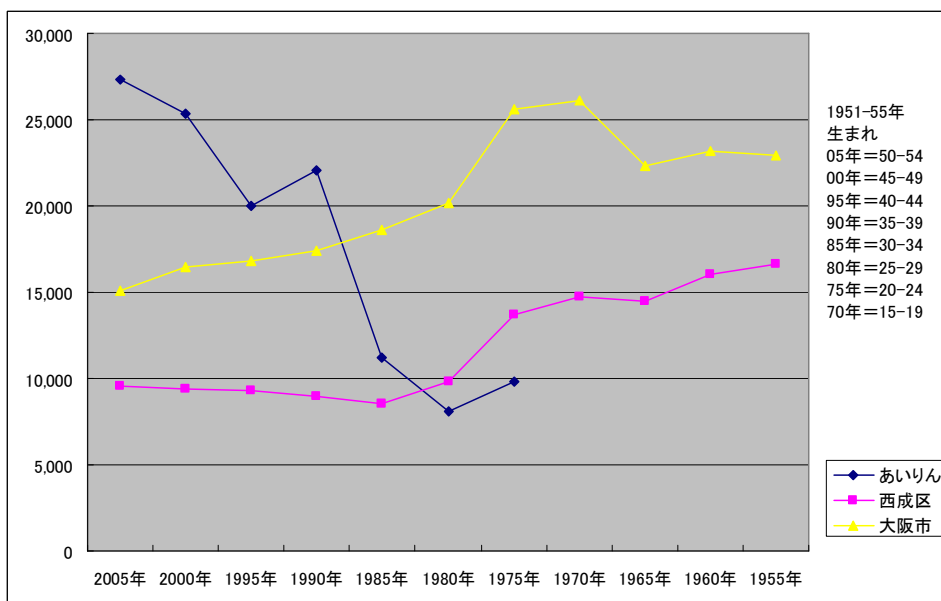
きたと思われます。この年代の人たちは、昭和40年不況（あいりん地区でも人口減）後、急速に大阪から他地区へ移動しています。あいりん地区では1980年（35-39歳）以降90年にかけて急増します。



「1945-50年生まれ」は、団塊の世代と言われる人々です。

大阪でも多く出生していますが、親と共に、あるいは青年

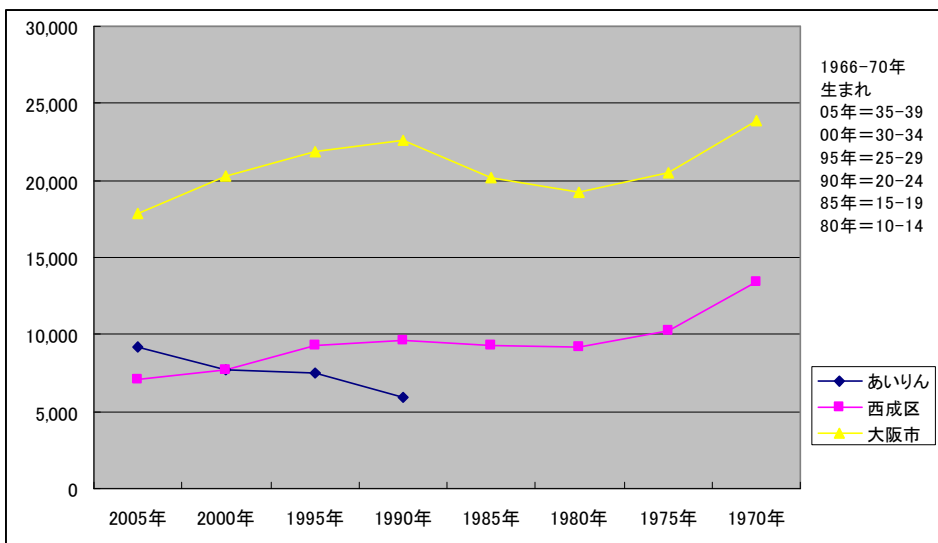
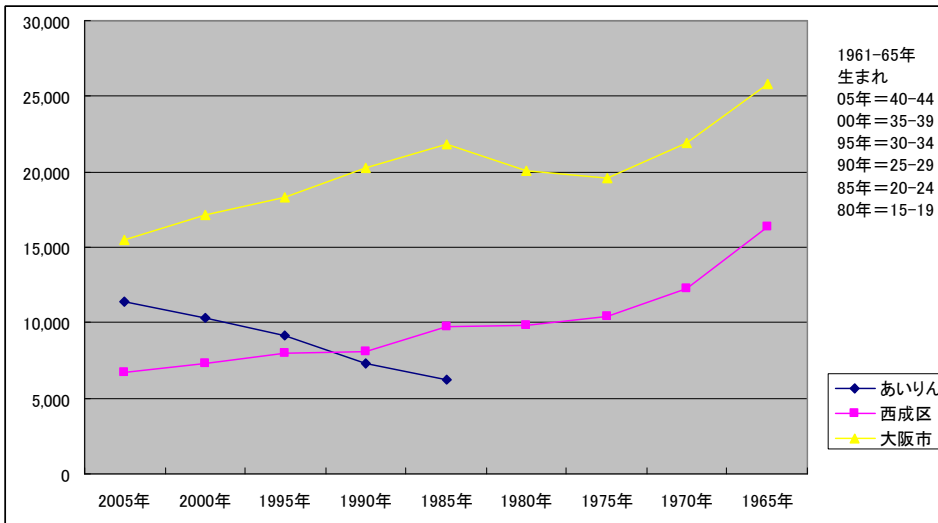
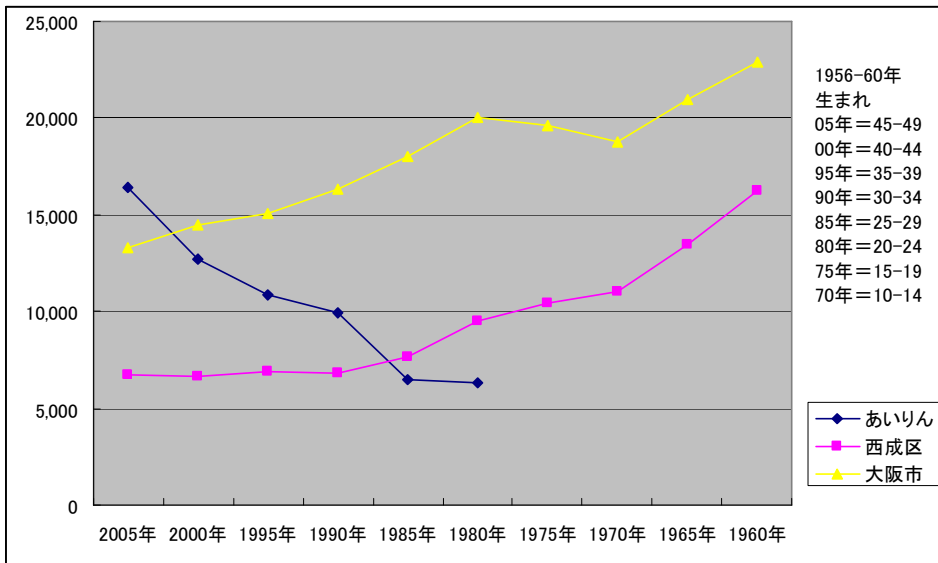
年期に単独で、大阪に移り住んでいます。第一次オイルショック期に、急激に減少しているには、不況の影響による帰省あるいは仕事を求めての移動、そして、家庭を持つ郊外への移動が考えられます。この世代は、1980年（30-34）以降あいりん地区での居住が増え続けています。



「1951-55年生まれ」は、親の大阪市からの流失の端境期の世代で、幼少期の変動はそう多くありませんが、青年期に流入が大きく、すぐに流出します。

西成区は、青年期でも出生数を下回ることになり、この世代以降の青年層を吸引する力を失ったことを示しています。

この世代は、1985年（30-34歳）以降、釜ヶ崎で増加し続けます。「1945-50年生まれ」の世代と共に、95年の落ち込みを上回って増加しています。



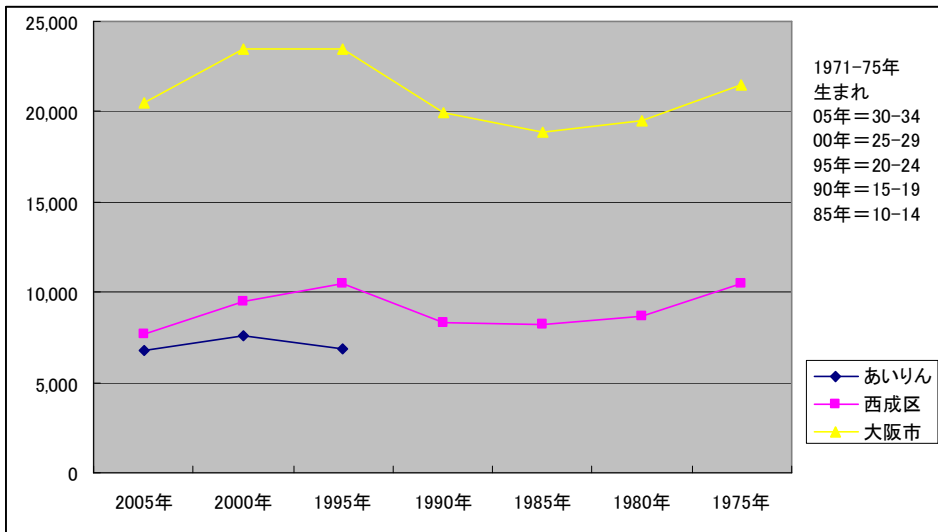
1956年生  
まれから以  
降 1970 年  
生まれは、  
親の郊外へ  
の移動と共  
に大阪市内  
から減少し、  
青年期にや  
や回復しま  
すが、元の  
出生数を上  
回ることは  
ありません。

大阪市の  
青年吸引力  
が 1975 年  
以降衰えて  
いることを  
示すと考え  
られます。

西成区は、  
一方的な減  
少傾向が続  
きますが、  
1975 年以  
降しばらく  
安定が続い  
ています。

これは、  
大阪市内に  
流失しなか  
った親世代  
の影響と、  
青年期に移

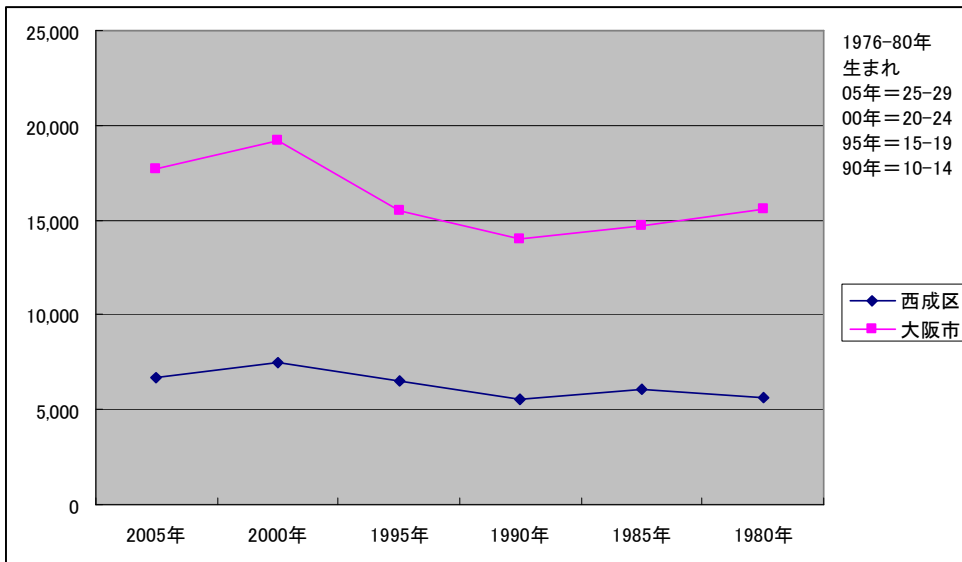
動できる要因が他地区にもなかったことによるものと考えられます。



1995年から200年にかけて、大阪市に少しだけ、青年を吸引する力が戻ったように見受けられます。

元の出生数を20-24歳では上回っています。

しかし、05年では、減少に転じています。



総じて言えば、大阪市は、青年期に人を吸引し、定着量よりも流失量が多く、高齢化を日本全体の年齢構成よりも激化させた都市といえるようです。

集客都市にある仕事は、青年向け不安定就労が多く、安定した「定着民」を維持できる構造ではないことを示すものであるともいえます。

逆にあいらん地区は、集客都市で仕事を求めづらくなった青年期以降の世代を受け入れ続ける地域という特色を持つようになってきているといえましょう。

1955年以前の世代については、あいらん地区への登場の増加が激しくなるのが、1980年から1990年にかけてという特徴があります。この間、あいらん職安の日雇雇用保険被保険者手帳の所持者は、1981年15,191人→1984年18,881人→1986年24,458人と増え続けています。

この手帳の増加が、新規釜ヶ崎来入者が手帳を作ったことによるのか、従来から釜ヶ崎にいた労働者が新しく手帳を作成したことによるのかを見極めるために、釜ヶ崎資料センターは、1986年12月30日と1987年1月5～7日の4日間、雇用保険給付金支給時間にあいりん職安前フロアで聞き取り調査を行いました。聞き取り対象者は、80年以降の手帳作成者と思われる手帳番号27000番台以降手帳所持者としました。80年代初頭の不況は「重厚長大産業」の整理として現れていましたが、その影響を探ることにありました。

その結果、不況業種の製造業からの参入が多いことが確認されています。

釜ヶ崎に来る直前の職業

製造—28人（繊維1・鉄鋼8・造船5・機械2・他12）＝33%  
 金融・販売・サービス—3人 建設・土木—27人＝32% 自営—12人＝14.1%  
 農林・漁業—3人 他—12人＝14.1% 計—85人

・釜ヶ崎に来る直前の職業、退職理由

合理化・倒産—32人＝37.6% 労災事故・病気—5人  
 自己都合退職—26人＝30.6% 他—22人＝25.9% 計—85人

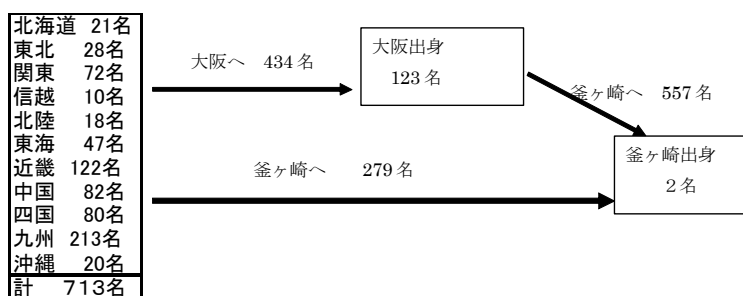
	平均年齢			人数	%
	来阪時	来釜時	現在		
来阪＝来釜	40.3歳	40.3歳	55.2歳	279人	39.6%
1年差	40.4歳	40.9歳	53.3歳	39人	5.6%
2年差	36.3歳	38.2歳	50.9歳	34人	4.9%
3年差	39.9歳	42.0歳	55.9歳	30人	4.3%
4－9年	34.7歳	40.7歳	55.3歳	153人	21.7%
10年以上	24.3歳	46.3歳	56.0歳	170人	24.1%
総計	35.0歳	41.8歳	55.1歳	705人	100.0%

あいりん地区への移動が中高年齢層にかたよる事情を説明するものとして、「あいりん臨時緊急夜間避難所（今宮・萩之茶屋）で実施されたアンケート調査の結果があります。

その調査では、出身地と、大阪に来ての年数、釜ヶ崎に来ての年数が把握されています。

釜ヶ崎に来た時期が、すなわち大阪に来た時期である人は、39.6%でした。大阪に来て、釜ヶ崎に来るまでに4年以上差がある人は45.8%でした。

先に見た年代別推移グラフで見た大阪市の特色、青年期に大阪に来た人は、左表では10



年以上差ある人たちが該当します。大阪に来た時の平均年齢24.3歳です。

釜ヶ崎の居住者には、大阪市内あるいは府下生まれの人含まれています。